徳島新聞　平成26年1月17日

時評とくしま

いじめ対策 科学の目で

徳島発「学校予防教育」

山崎　勝之
鳴門教育大学大学院教授

「学校教育は科学になるべきか？」―。先頃大学院生50人ほどに聞いてみた。半数強がNOと言う。同じ問いを医療について尋ねると、ほぼ全員がYESとなった。

教育も医療も、詰まるところ人の日々の営みの健全化を目指すわけだが、教育だけが科学とは無縁で済むというのは納得いかない。学校教育にとって非力極まりない科学であるが、利用できる知見はふんだんにある。断っておくが、ここで言う科学とは自然科学や一部の社会科学のことで、誰もが再現できる内容をもつ。

この科学の目をもって昨今のいじめ問題への対処を見てみよう。大津市中2いじめ自殺事件に端を発したいじめ問題の第4のピークは「いじめ防止対策推進法」を生み出すまでの衝撃となった。

しかし、抜本的な解決は依然として無理だろう。なぜか。その理由は多く、学校教育そのものが、人間の問題行動の発生に発達的視点を欠き、行動の成り立ちを素人考え（主観や個人的経験による）でとらえ、しかもその多くが間違っていることが指摘される。加えて言えば、解決に向け十分な労力と時間を費やす準備も覚悟もない。

現行のほとんどのいじめ防止教育は、何らかの抑止力を行使するものだ。「この学校ではいじめはさせません、先生が見ている限りいじめは許しません」という類いの教育に終始している。時と場が移れば、性懲りもなくいじめ加害や傍観が芽吹く。その芽さえも出ないことこそが抜本的な対策になる。

この抜本的な対策は、問題行動に至る子どもの大もとの特性に踏み込む科学的な教育が担うことになる。その教育をやって来れなかったから、いじめも不登校も、相変わらず頻発する。もちろん、この現況に手をこまねいているわけではない。この閉塞感漂う学校教育を科学の舞台に押し上げる試みは、この徳島から始まっているのだ。

鳴門教育大学の予防教育科学センターでは、子どもの健康と適応を守る「新しい学校予防教育」を開発し、展開している。徳島県教育委員会によって事業化され、順調に全国普及の緒にも就いた。まさに徳島発「学校予防教育」と言えよう。

この新教育は、教育目標、方法、評価のすべてにわたって科学的知見と方法を適用しようする。学校教育そのものを転換する力もある。ここから学校教育に科学の息吹が流れ込む風穴が開く。私はそのときを、一日千秋の思いで待っている。

やまさき・かつゆき　鳴門教育大学院学校教育研究科教授、同大予防教育科学センター所長、兵庫教育大大学院教授（併任）。専門は発達健康心理学。著書・編著に「世界の学校予防教育」「うつ病予防教育」「攻撃性の行動科学」など多数。

本ファイルの著作権は徳島新聞社に帰属します。記事・本文・画像の、無断転載は固くお断りいたします。